印度學佛教學研究第五十四巻第二号　平成十八年三月

日本における『金七十論』の注釈書
――快道撰『金七十論藻鏡』を中心に――

興津香織

はじめに

『金七十論』は中国で真諦によって漢訳された『サーンキヤ頌』の注釈書である。日本においては、『金七十論』が書写されたことはすでに天平写経の中に記録されている[1]が江戸時代中期から『金七十論』の刊行及び注釈書の作成が盛んとなった。本稿では注釈書の中でも初期に成立した『金七十論備考』（以下『備考』）、『金七十論疏』（以下『疏』）、『金七十論解』（以下『解』）、『金七十論藻鏡』（以下『藻鏡』）の四書にある、『成唯識論述記』（以下『述記』）を引用した検討のなかでも特に『金七十論』の長行と世親の関係についての考察を見ていくことによって『金七十論』に対するそれぞれの考え方を明らかにしたい。

サーンキヤ哲学と世親

中国仏教においては、サーンキヤ哲学と世親との関係が真諦訳『婆藪槃豆法師傳』によって注目された。そこには世親の師である佛陀蜜多羅が数論師と論議して敗れたことを後で聞いた世親が『七十真実論』を著してその説を論破した、といわれている[2]。世親の『成唯識論』に注釈書を著した窺基は「彼論長行天親菩薩之所造也」（『述記』巻第一末）と述べている。この説を継承しているのが玄智の『三巻本浄土真宗教典志』[3]であり、「天親論主著述」として

金七十論釈三巻（真諦訳○此是数論外道之書。天親作釈。出唯識述記二二十三。此有異説。如衍繹編第二述）

という記述が見られる。世親が『金七十論』の長行を著したということはその当時、日本においても受け継がれていたことがわかる。

『備考』

玄智と同時代の暁応厳蔵［真宗・大谷派］（享保九（一七二四）年～天明五（一七八五）年）により書かれた『備考』には序

論において『金七十論』の成立が述べられている。しかし暁応は『述記』巻第一末と巻第四末を引用するのみで、何の検討も加えていない。

『疏』

智幢法住［真言宗・豊山派］（享保八（一七二三）年～寛政十二（一八〇〇）年）による『疏』において『金七十論』の成立については序論に以下のように述べられている。

五長行由者。識疏曰「遂造七十行頌。乃至彼論長行天親菩薩之所造也。下第四巻更當廣述。」由是謂之似今長行世親所造。―中略― 本邦人人相謂菩薩造也。蓋誤述記傳之失矣。基疏由致乃説本偈。彼論長行下即約勝義七十末論。故爰讓下。至下説由以宗因喩盛破数論。如次上引。而今長行無一破之。又第八六十一左次文廣談如意論師縁以集苦聲犯強被負。勝義七十亦爲救之。彼明因果前後相生。而此長行亦无此文。―中略― 恐應是依勝義七十世親梵本。非此長行。不爾何爲違此論釈。―中略― 故知世親勝義七十決非此釈。古人不知因審辨白。可謂今此長行釈者未知誰造。恐彼宗門流爲簸揚焉。

法住は『述記』巻第一末から引用しながらも、『金七十論』の長行が天親の作とするのを批判する。すなわち巻第四末に「世親乃造第一義諦論。亦名勝義七十論。」（大正43.379b.19～）とあるのを踏まえて、世親が造ったのは勝義七十論（または第一義諦論）であって、『金七十論』ではない、と主張する。そして本邦の人々が『金七十論』の長行は世親が造ったと考えてきたのは間違っており、長行は誰の作か分からないと結論付けている。ここで注目すべきは、『金七十論』の長行は世親が造ったものであるという説を法住が初めて否定したことである。これは極めて正しい解釈であるが、法住の疏を参照した快道はそのことには一切言及せず、長行は世親が造ったものであるとしている。(4)

『解』

香山宗朗［真宗・本願寺派］（?～天明八（一七八八）年）の『解』は本文の前に「金七十論序題」がありそこから宗朗の考えを知ることができる。以下にその一部を引用する。

六註解所由者唯識疏曰世親乃造第一義諦論。亦名勝義七十論。以對彼論而破彼外道。若不知所破何以能破之。然而古来未講此論。乃有二由。一為外道之論無益於人。雖能解之不深究耳。又其義微而文多誤脱。若非察義如視火正文如拾棄者安能講明。今註有三由。一知所破義二知内法弊三世親造長行故。若一分學外論佛既許之。

冒頭の唯識疏とは『述記』巻第四末の文である。この記述から明らかであるように、宗朗は世親が『金七十論』を論破すべく第一義諦論あるいは勝義七十論を造っており、宗朗自身が『金七十論』について註をつけるのは世親がサーンキヤ哲

学を学んで論破したことにならうものであるとしている。宗朗においては『述記』の解釈がそのまま継承されていることが分かる。またこの最後に言及された「佛は外論を学ぶことを許している」ということは、つぎにとりあげる快道の『藻鏡』に引き継がれていく。ただし宗朗は最後のところで『述記』巻第一末によって世親が『金七十論』の長行を造ったから自らもそれを研究するとしている。また

中国護法其難矣哉。前有龍樹提婆後陳那世親。各以命世之才振玄緒之已墜揮智刃断邪網。乃使正法如披雲霧覩白日也。　―中略―　吾東方純正之邦學佛之徒禔福白毫比勢紫綬。幸不為勝数所陵轢。　―中略―　余以腐朽之質夙負護法之任慨然獨歎夫朱紫相奪。

というように宗朗は護法などがかつて仏教の教えによって、仏教外の説が蔓延するのを阻止したのに倣って今ここに自らその任を背負って臨むのであるという決意を表明しているのである。

『藻鏡』

林常快道［真言宗・豊山派］（宝暦元（一七五一）年～文化七（一八一〇）年）による『藻鏡』においては以下の部分に『金七十論』の成立に関する快道の考えを見ることができる。

初論起由致者。有客難曰。佛教巨多盡之學難。曷出自宗得入他教。何況此論是外道宗。若今讃揚非但自己他墜邪。何為不慎。　―中略―　答。不曉邪義爭辨正。故欲通正須先學邪。夫九十六種之大外道。九萬三千眷屬數多。而於此中勝論數論最為頭角。西天既爾。故今亦辨釋此論以充階漸。

冒頭に仏典（中略した）を引用し『金七十論』という仏教徒にとって必要のないあるいは妨げともなるような書をわざわざ学ぶとは何事であるかという疑念を抱く対論者の主張を想定した後、快道が『藻鏡』を著す理由（またはなぜ『金七十論』を学ぶのか）を述べている。その理由とはまさに邪の教えを理解できなければ正を弁ずることはできないということであり、先の宗朗の考えと一致している。

つぎに「外論を学ぶのを佛は許している」という宗朗のことばを以下のように快道は仏典を引用しその根拠を強化する。

由是地持中有此説。「若一日中常以二分受佛經。一分學外典。若菩薩於世俗經典外道邪論愛樂不捨不作毒相是名為犯。」毗奈耶律作如是説。「因舍利弗降伏（無）後世外道佛聽比丘學外論。一日分三分初中二分學佛教至晩讀外書。故祇洹中有書院置大千界不同文書。佛許比丘遍讀。為伏外道故不許依其見解」。四分律曰「開學書及學世論。為伏外道。」瑜伽論三十八七左曰「諸菩薩當求一切菩薩藏聲聞藏一切外論一切工巧處。」當知佛子必習外論而作用心。故世親論師釋此論偈。基法師著十句義鈔竝是為伏外道邪論。客唯唯退復受講義。已遣疑情

この最後にあるように快道も宗朗と同様、世親や慈恩大師が仏教外の教えを批判した姿勢に倣って『金七十論』をあえて

学ぶのだと表明しているのである。以下、快道は『述記』の巻第一と巻第四を引用し、『婆藪槃豆法師傳』、『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』『大唐西域記』を引用してその内容を極めて精密に検討している。

結論

以上、江戸時代に成立した四注釈書における『金七十論』を取り上げて解釈する理由、またその長行と世親との関係についてのそれぞれの注釈者たちの見解を見た。すべての注釈書は『述記』を引用しており、暁応は伝統どおり引用にそのまま従い、法住はそこから全く違った結論を導き出し、宗朗と快道は伝統に従いつつ、暁応・法住には見られなかった「自らが『金七十論』を解釈する理由」延いては「仏教徒が今ここでなぜ『金七十論』を学ぶのか」について述べており、現代の我々から見ればこの時代に突如として起こったような印象を受ける『金七十論』研究に対する理由の一つが明らかとなったといえる。

1 『奈良朝典籍所載仏書解説索引』（木本好信編、国書刊行会、平成元年）p.61、p.62参照。現在判明している『金七十論』の注釈書の数は散逸したものを含めて二十六、作者は十七人（作者不明の書が三）に上る。

2 『婆藪槃豆法師傳』（大50.189.b～190.a）。また『大唐西域記』巻第二（大正51.880.c～）の乾駄羅國についての記述のなかにも内容は若干異なるが、世親が数論師に敗れた師の恥を雪いだ（しかしここではサーンキヤ説を論破する著述のことは記されていない）と述べられており『述記』に受け継がれている。『述記』巻第四（大正43.379.b.19～）に「世親乃造第一義諦論。亦名勝義七十論。以對彼論而破彼外道言。」とあり、「七十真実論」・「第一義諦論」・「勝義七十論」は同書と考えられる。

3 『三巻本浄土真宗教典志』巻第一（『新編　真宗全書』史伝編一〇、昭和五十二年）二三三頁

4 金倉圓照博士は、『述記』巻第一末にある「彼論長行天親菩薩之所造也」は誤っており、「世親」でなく「天親」としているのは「多分後人の註記が紛れ込んだのであろう」とされる（「金七十論疏解題」国訳一切経和漢撰述43　論疏部二十三、二五八～二六〇頁参照）。しかし『述記』では世親・天親がしばしば併用されている。たとえば「本頌三十伽陀世親所造」（大正43.233.c.18）、「三十頌本。天親菩薩之所作也」（大正43.231.c.5-6）。従って巻第一末の文は誤解されやすく、『疏』はその点を「蓋誤述記傳」と述べている。

〈キーワード〉　金七十論、サーンキヤ哲学、世親、江戸時代、快道

（国際仏教学大学院大）

same meaning as Xuanzang's translation. The expression "*pañcaskandhaka*," however, does not mean five *skandha*s, but rather that which is accompanied by five *skandha*s.

101. Traditional Japanese Commentaries on the **Suvarṇasaptatiśā*stra 金七十論: Focusing upon the *Kin shichijū ron sō kyō* (金七十論藻鏡)

Kaori OKITSU

The **Suvarṇasaptatiśāstra*, which is an important treatise of Sāṃkhya philosophy, survives only in the Chinese translation done by Paramārtha 眞諦 sometime between 548 and 569. Commentarial tradition begins with the citations from it found in the *Chengweishi lun shuji* 成唯識論述記, written in Tang China, and continues with a real exegetical boom in 18th century Japan. Although the Japanese exegetes refer to the same passage cited in the *Chengweishi lun shuji*, they express different opinions concerning the **Suvarṇasaptatiśāstra*. I analyse the interpretations of this passage in the *Kin shichijū ron bikō* 金七十論備考 by Gyō'ō Gonzō 曉應嚴藏 (1724-1785), the *Kin shichijū ron sho* 金七十論疏 by Chidō Hōjū 智幢法住 (1723-1800), the *Kin shichijū* ron ge 金七十論解 by Shūrō 宗朗 (?-1788), and the *Kin shichijū ron sō kyō* 金七十論藻鏡 by Rinjō Kaidō 林常快道 (1751-1810) and focus mainly upon their understanding of the relation between the prose parts of the **Suvarṇasaptatiśāstra* and Vasubandhu.

102. Plural Theories on Vijñaptimātra in the *Mahāyānasūtrālaṃkāra*

Hiromi YOSHIMURA

The Vijñaptimātra theory varies in its expression. The *Mahāyānasūtrālaṃkāra* contains these expressions with different key words showing a variety of different traditions. One of them is quoted by the *Mahāyānasaṃgraha* by which the author established a new *vijñaptimātra* theory to unite the three natures (*trisvabhāva*) theory and the theory of intellectual entrance to the non-characteristic (*asal-lakṣana-praveśa*) into one system. Through this re-